春乃白

春社日

信濃何丸撰釋

端書社うち

一書に清水納言の素行のやうに書くむらさきもちいるくもれとあるを發端とするとなり　愚考の所なるべきらふよ

まつとよ松のしらべ重五の枝折れける行墻かと

近さふ白氏文集曰五架三間新草堂石階松

柱行編墻形とのごとなるむ　無味堂曰重五

そ松井半七名古屋の郊外足尾村に別

莊を名ぢらふ

涙ケ　まよ行の惟子脫くむ

松のしるみ留をいまく

為考此所なる詩の素材の留形の

名名留りて素二と号すさて次社伝去留

の由来は彩れ入ふ黄帝の時鳳凰来儀す昆

渓の行を伐る風壁の雪まるなるなて作りまし

一留形まとも必百代の兆なりと見迄て文王

を附しるり素材の留りふ文王社附き訳ま

文王社を中ふまよりて

雨の為りく　の角社形き茅

世上の説りまを文王囿方七十里芻蕘者往雉兎

去往ロ美臺美沼を築くと社ふいひしらし

まるるを大なる非るを是まて迄世の俗説社

あふるきるを知る事此附を要れすふ文王

の一名をいひて附自社訳をりふいまを見

ひ先注まるいふ通の前自の後自ふたよりて

ものを當分を解す一をまをそなをしりて
人をを文王の德をなのけて学よ面をむすひさ
ものと社撰憶説よりして皆なのてくひりのるり
詩の大雅文王之什曰周原膴〻堇荼如飴爰
始爰謀爰契我龜曰止曰時築室于茲掘之
陾〻度之薨〻築之登〻削屢馮〻百堵皆發
鼛鼓弗勝留をいくてく涙となりを引出し
て土ほりと附ムらくとしよ学を心よ拾て角の
ものきこ学とをを働るる蔡の紫先九くして
角なり木紀きハ槌のぬく膏のねとしよ学る
学りれるり

春　二

多君より半　君奥れ砂りて
魚考遠倉八幡を君より社櫃まて十八
町すくて此を砂添くして三足往て二足戻る

この如く半をとしひ砂ほとしひ他の神社よ非す
花よ長男の帝　舊なるり
魚考凡甲をを事物紀原曰唐軍用韓信所
造云く名物六帖云唐書曰悅傳張丞急以
紙為風箏高百丈過悅當上悅使善射者
射之下略全体を長男のなく一きものの数うり
ををきをちさくして小児児童のをてなをを沢ハ
博物志曰紙箏糸を引て上るを児童のをちを
略てのをを弄ををむ芝肉漿を洩さむるるり
ををきをを長男のなるなと作りをるを言まの
形容をり遠倉元物よりをを時分をり
いををこのしこき　五位　北射之
松北末よ宮司の門をうつふをて
ををの法をを見ををををををを

愚考五位の針醫に慣しるを神識の宮司に
ぞはりし后宮司にて對の附なりけるにさ
しれあとも見えしと禁中れたはりなるを述
るとぞをしなり識原日針博士七位典薬所に
歸りて五位とは云て
終からけ豆腐を考ふとられける
愚考ぞ未明のそきりて人の往来なきを
見えなよ豆腐置の始起を附より一本に
とらまへなりと書て折りたる云請同所なり
そりまるを札なしるの世の中に見るゝ旗も
ありと見ゆ近所の佛書を粗見るにありても
すむ所なりと留るを留めたるをぬるとなると
留りの數もおかしれ皆いしき次第にあるれや
一書にありとりてよそを證ししくたりに

一つれとりてそよくしてみえんと言ひしなどかんえ
ふりかさし堂に出さし豆腐をとらまへなりと云
て洩りのゝすゞめられの紙思案なり一しなる
そやといひ勝さねも一合かをさまらぬなりけり
「なりきと云なりしのてみえりて合ちゃに佐らひ出す
なるぞ至て窮しくてそやと心れのつかてふみえに
て百ょ一のそふみえなり近江の人ともしみなを
といよてふなを糺し解しつゝかるむ
穂蓼 生ま 發を住居に伐別して
我名を 橋の名よよふ 丹
芳室日中紀難波に米屋太郎助といふもの米穀
を賣買することを家業とすその住居なるちかきに
横切なる堀ありて世渡りの通路りとして官庫へ
中をて自分れ橋をかけたりしの天変地妖の為に

亡ひてらけ垂する母なるひろ氏れたるけるれ
役刑のるよ方代を格よ費し絶よ家れとろ一て
小義ひとら奏れこう住居とをしこのそまさいくか
と形く代るをして絶すとそさまれ時れ人
此格を右部助格と呼ををしうとこの此格
いろ形存して滅絶本うぬか町よこのまろ

新無 形るる　出家かくし

かくきす西りるを歌よまむ
的羅ひとりを二人してとけ
成美曰西行家集よきくるる家ををよ形むか
くきす山田の原れ牧のむらを　一書よ貞享
元年世さし紀りよ芋洗よ女西りるるを
形るまむ此るを取て連るとを形るを
愚考二るの附意をのめし的羅の花を八

胡無礼語の西行谷の俤まて芋洗よるれ余意
を取て附るるめるるを祖翁のかるを取て
附るるす又附るを取てかるとすを可るり
附句を附るよ染真す族を見ゆるを徘諧ようと
き人の不為るる一し
世よ為るる局泪よ年とるて
一書に中院の局小督の局るるの俤るると云
愚考源頼の附を見き八芝全小督の局るとの
俤るるりるの局嵯町中納言成範卿れ女
高倉帝れ妃るるり清盛のそねみをうけ源頼
聖よのるき形大井川よ入水して失るの墓八
源頼の天龍寺よなり
家良坂や畑うけ山の八重櫻
愚考家良の新の八重さくらと詠とて

この色八重橘の名本多し素戔嗚は一名
殷若姫とまいる

口すくぐいき清水 乳の泉

愚考書の藤の花は清水を養生論曰二月行遠方
を避ける事なかれ飲陰地流泉令人發瘧是不可知也素
問雷公篇に出口すくぐいき汁まで立春まるる
ら氏雑の花のつひしるる

笠白き大秦 祭 是より

弁地日本紀曰仁徳天皇四十三年百済の
王子秦酒公奉献名匿の雄略帝の時帛
紬を献ずゆゑ大秦の姓を賜ふと云く禹
豆麻佐祭を九月十二日を牛祭という
菊の花 ゆゑ

春 五

表 町ゆきて二人 髪 刺む
暁 いとの 車 ゆくすち
一書に秦氏の家没落を弱王と云牛飼草苅の
なりを竹王丸と云二人の子
として大秦の里に
樂人
治拾遺に東河院に
夜に入り門戸を閉て往来
して足を一本ずつ
ひそかに戸の隙穴より
見ると我を見むとす
おそれて
歌を詠す羅とのを我
ふりくわりなを
表 町ゆきて二人 髪 刺む
暁 いとの 車 ゆくすち
一書に秦氏の家没落を弱王と云牛飼草苅の
なりを竹王丸と云二人の子
として大秦の里に
樂人
治拾遺に東河院に
夜に入り門戸を閉て往来
して足を一本ずつ
ひそかに戸の隙穴より
見ると我を見むとす
おそれて
歌を詠す羅とのを我
ふりくわりなを

しうまやの子たちのしうと
まてをかくしてかくしてこれを流し夫婦ハ
貧窮して火宅をのがれ出むとするの時いまの車
ゆくさきをとゝめ其世の喧しきいまの形なるかゝる
まやのうちむとまを来たりまの車形り法華
三車一乗の心を形よ世中を牛れ車のうちに
ちゝ男女の家をいでて出ず又宅抵の附よ
茅屋を焼きて私ひとりの家を出ぬむといふ
ふ暁いまの車やうちの者夫三車一乗といふを羊
車鹿車牛車彼三車をもて法華を誘引し
而後よ只大車の宝物をもて荘厳し安穏第
一形ちをもつて三車ふ乗ぜしめたまへ丈
の車をもむしひ出すてこれある訳あ
るなれども平生の信法平信を見ゆるまうまの

とうをとをとをとうふ形ちの
萩しみ　きくみ　すゝ　方日の系
一書ふ方日の系弦弱ふあるまうを宮ふ
を方日の今武を系をの形をを見る一
出ちの出ちる木の根ふ花の紙ちむ
枝亭曰紙の魚を胡桃ふ酔ふのうちみ
の紫をとりみちらして水上ふ手を皆流て流ちと之
謬ひ　ちをちを　喜礼湯の山
愚考湯の山を按法函宥言の温泉之舒明
帝三年浦安ちと云く則十月行幸なり是温泉
行幸の始なり形ふ形ふ形ふ形ふ形ふ形ふ
神ちをを形ふ形ふ形ふ形ふ形ふ形ふ
信正紀文を書写し泉底ふ望むとうち法
あり湯の山按現とは是ちの日本第一の名湯之と

云く一説に小湯谷山なりそれ常に附
あるところを大に非なり湯谷山を出ずる那
賀を湯の峯なりと必ずなるべし一
のとをりや紙紫の袂 伊勢の常
此なる稚しの雜説なりといへども和漢
一きはそれを略つ 一書に鹿島の
岩陰 常なりと云 一説に東西必し
のよきをえらひを 常 袂と廣く作るなり
なり一

内侍の云ふ代これ眉の圖

一書に内侍を女なる天子の御例に作りて
侍る歟 執行に女官なる古今れ眉をえらぶ故
物をそうしなりたるむ 愚考眉黛を唐土
もてそ素に神の明皇避安祿山難幸成都

今禹工美十眉圖所謂連頭八字走山倒暈
横雲驚翠新月抑絮峩眉是也卓
文君の眉を黛をやとしてを山をの
そむかすとなり和漢眉の圖異なる一
ものれ中を行きに
自當の内侍を義貞の侍をねて軍
義貞内侍をねて軍をまねこなる暦應元
年越前黒丸の城に流矢に中りて處
名をなる 栗とあり
一書に大岡小田原侍れ相列山中れ村名
橋栗を献上を事あり
一夜なる岩を馬なる寺船や
愚考摂津國田中金毘寺なる千觀阿闍梨
寺役のいとなに馬を遣て淀川筋一出て

往来の旅客を助けあるいは或る酒肴を或いは寺
[illegible]て一宿を[illegible]て銀雑を寄
[illegible]元亨釈書扶桑隠逸伝等より見える
[illegible]父子を歓喜[illegible]
[illegible]を歓と号す平生笑歌[illegible]て遺像を実伝
と唱[illegible]と云て[illegible]壁集より表し

いそ魂　[illegible]

愚考馬[illegible]寺といひ[illegible]
天王寺と[illegible]太子黒の[illegible]
て二月の魂[illegible]和漢語より曰倭國
仏法の元始[illegible]建天王寺推古帝三十九年
二月廿二日化四十九歳と云て魂祭[illegible]事を往古
を六盆[illegible]二月十五日五月十五日七月十四日八
月十五日九月十六日十二月晦日報恩経より見え

[illegible]
陽炎[illegible]
書面袖より清[illegible]
因を指て花[illegible]里より[illegible]
愚考此三[illegible]國栖の翁の供[illegible]源平盛衰
記曰清見原天皇大伴王子より[illegible]
吉野の奥より[illegible]此[illegible]國栖の翁栗
の皮料より[illegible]と[illegible]魚を供御より[illegible]天皇
御製より[illegible]の國栖の翁の[illegible]
[illegible]の義丈姫[illegible]後の花[illegible]里より[illegible]
して[illegible]
ちうの[illegible]を[illegible]中の[illegible]
[illegible]や三井[illegible]未[illegible]

愚考浅井家の長女お板若狭三盛安達女
して志賀寺の廢地を再興して盛安寺と号し
て相續すをハ崇福寺の話なれとなれとも
そ白仮名ちりのるり次れ何そ近江の山しの
雪けしきをなのらうう
るひくれみそゆきのやうし
見年ちり廿九日れ月きき
愚考是そなの佛尼の十六夜日記の作之安嘉門
院阿佛尼後子れ為氏卿と話式年後れとふ
ひきて瑞龍寺一所話ふ下わ年ふ十月廿九日
の早天ふ箱根の山ふうのふ廿九日れ月の
出しほをそひてと彼日記ふくハ廿六きハ
ゆたりて暗つ話とりといひ雪の山しといひ
れる月とむすひうる眼力甘賞すのふ絶う

そきき二花三月そ宮うる法るりそきをとの
巻れ月四ツ半うそ廿評ふ月るき浪の白八月
ふなのうしるとしめるそ雑ふ月ふ
ふの追加の表合ふ月るきそとしふ8月ふの
らしやきふいるすてるきしるす月花を一巻
の的なきハ出白ふきすそすきを此巻の月三り
るうう紙白の月なきハ宴ふ至て廿九日れ月のい
とのすうるをきてそのの補ひとをるをうる
君れ作とめふ 祢 ちみ わけ
愚考大和ものうふ壬生れ忠岑泉の大将の
ハ借ふて時平公のハ鈔一ふうて白ふ永ふて酒
るとるうるひ夜いくを更てきふ大臣きれと
るきをひていはくまうものうるを作ふやき
るううハ格子なのきてきををひうふ忠岑ハ

せうし大臣の御供して御階の下に松明ともし
ぬかつきひさまつきて御消息とゆてとりつかへ
忠岑このときのやくあるとしれ我のうへを夜
半にふみよけ詠文りけるそ世の人て大臣ほき
たまふらえしく饗應しまふと云く良臣れ
勤功廣大なり月さしいきしりんをふすまて一首
のうちに和歌の意味を備て詠に玄妙なり
霜なとふみわけと作りつきさを成越の雪を述る
字斗に詠ふみわすてとを作るなるむ露雲雪
雪のりのとく皆雨に似て氷るも水の化するまたハ字
りのま類なれしより殊り此故事によられを誰の
詠んを附て世のうらひをとりたるむや

蛙のみ寄てせししき露光なる

成美曰源順和名鈔に云かへしきと為く蛙なり
史をりしよてよきこるの墓し部よ謂し用ゆ
荳山曰南史曰孔稚珪斉明帝之時為南郡太守
門庭之内草莖不剪中有蛙鳴王晏嘗鳴鼓
吹候之聞群蛙鳴曰此殊聒人耳蛙云我聴鼓
吹殆不及此晏有慙色此なるを諺叢等にも
出て名高き嘲なるまたん且蘂を孔稚珪に取て
のる作なりし

額にかゝる　春　雨　れ　かわ

愚考章草孝標詩之一聯田家云五行水旱
卜蛙聲荳等に符合しける服なりこの山中
五暦日の意ゝまゝ叶ひつき話なり痒つきぬるを
といふより枕をかくさけて額に雨のりそう
けるなるべし次に第三のるま容りてとハ

不自由なる服を一言不敢てその人を窺ひたく思ひ始めて又その人は心すして内をそぼうする事
思ふと皆意を別にすれども一人なり出を
云作るに外一物なれども傳られそこひとなりて
作をうしなふ人なり一概に見て為る人を為自服
内なる迷ひ第三を指の場にて必ず一出し又為る
服ずるを迷ひ第三八必内一入ねいなるなるとなる
をいふ族なるものなりこの中にて信ずるに為の
日遊加の六自を皆ずして内を併ずる形を
等にてもうひをもて一出迷るなる上
に迷附迷まる上を以て附るまは他の難なるむ

岩れるより義　見ゆる　さと

愚考新深に拙歴の比新既のものしに使て
寺実なるに雲例サキの漢を汗より見まと西岩

そひ一なる間より義れ見えるとして義なる施
餓鬼なり後自に瓶中なり義後に叶れ比
樗山日房例に出者ケ濱といふ所あり いりて一の
子れ紙のれそきるを待て大岩を左く切
あけさせて沖の紙を見居るに形すこうして
岩の上に夫婦ともの形ありてちのめ居て と
いふ今牧岩上に夫婦石の形あり施餓鬼の
附るのをひるむや　芳宣日おのいそ附ふ
施餓鬼れ俗といふて見まて濱例志度
の浦なて心にもて附るむ寅を弘法出
産の地及ひ出家密つに入まに旧法すて
泳谷山善通寺なり四國八十八ケ所第一番の
次の岩間より附るを海上より見上する
絵巻にてこの地平京なまとる門前

所ありて海上よりのぞむ時は出雲の岩小屋
なるべしとぞ記されたり此の記事あり
こゝいはゆる陶器を製す志度焼といふもの
なるべしまた海上よりうちちるのぬるを紀に
よりこゝに陶器の大なるものを出すとあ
りしかるに今は見あたらずとぞ

解てやれかのむ枝むすぶ　松

一書に曰昔有人往来の人の左の手をうつ
枝の枝をとむすぶ是岩代のむすび
松を育る王子なり故なりとぞ
　愚考に曰松を岩代と云
ふの紀列岩代山の事也松を肯馬王子の
むすびまひてよめる歌日本紀に岩代の浦
枝を引むすび幸なくとぞのむとぞ

とぞ松のみ又拾遺集に曰松好忠家集に
えまいそのむすび松の手を結ぶとまたまの
こゝ一き又落中八伊勢の浦の宅に
すび松をり侍を紀の岩代の松の侍ちるし
ひろきるを猿のひとみたるのをみて彼の辺
に知己の侍あまたをねたしとぞ
曰我を侍ちるを
に此度前のむすび松を解てや
忠の子とを結ぶとる彼好
にこゝて侍ちるを一きといふを心
今よりそ侍ちるものの
　同十九日荷宮室に
愚考に曰短冊百韻子白
る一首一首の法なり此巻短冊の歌二十五首

中ごろの此割書をもて旦暮と為の字をこの字にして二
度の俳諧なるよりて短冊に引るるものの初懐紙の中短冊
百韻を五十韻にしく二度に出るこの俳諧
八短冊に留二ヶ所なるもまた為の自注
といふ花は故事といふ注書を前五十韻にして
後五十韻の注をしるしめいに同定して
を産の二度にまたがりて則二度なるを所をこのつと
いふなるものなるべしとをらまを産法と
犯すべきをまたを近代俳諧に百韻の中短
冊に留三ヶ所なるを此分にまた稽しの法
やまくるる俳諧を数多見るの作法なるを
してその罪を糺すの為にて近年を規矩
準縄を古めうとして今時すべき人のすくなく

なりぬ半を分道に隨こうるる

秋の和名に　一のうら　順

愚考源順を嘆傳天皇四世左馬助攀之男紫式
部を後宮位下なり和歌の達人梨壺の五人仙古今
双の才人永觀元年卒行年七十三自然智礼人
まて和名抄を本朝の亀鑑なり

ふまを　の　月　に　ふ　ふるを　唐海にて
跡を花　四　亥　ふるを

一書に山門や三井寺の男の髪を唐海に
ふるるを四亥の里の捨女を遣をうして又
唐海に結ふるるやはり昔の法の教のこのよい
といふなり　一書に堂上方の女中の旅に
出る旅なり法を花と為の方を法ふるを
といふなるまて四亥を大法なり四亥まて

繋ぎて唐海に結上しるくいひまくしを連と共に花に注のまいとく
曰ふ哀を大津の松女所の前白れうはるように
何とぞ旅人の学すべきに一夜書れ律すして
女中れ旅姿にあるべ紫苑所八町をとう
とく故に曰ふと哀もう　成美曰蜉丸を延喜
第四の宮にて松行を丸の蜉丸の奥概あまハ
さの関れあるを曰ふ京川原とて
紹鷗が瓢を始て米八形く
一書に武田伊豆守信重入道して大黒庵紹鷗
と号す東山殿に仕て茶道に奉し　或人問此
仮花生の瓢にて茶の白れ附見侍るを
しと難す愚老除曰老人なるといふて茶人に連歌

れ附肌むはるくして安とうるさう　むと止ぬ分
歌に為ひて変化のなるまを記す紹鷗の語を
書し瓢の花生なるむ隠去の米入りて不拘を
中に米形きを一百れ俳優るるて古の拘主を
と歌向を立るに連歌師の行うるる連歌の
りとを金元るる米さ〳〵るきに連歌の金摩
を立むるいそうくして方るを中に為なき
らのるる紹鷗を利休れ師京曰茶点ひすの宮
に隣るの中に大黒庵と号すより　和漢三才
圖會に見ゆ

連歌れ律にあるいそう

滝童に柴押まけて言とめむ

一書に井蛙抄に曰後嵯峨の侍時吉田家に
て連歌なるる女房兵門佐少将内侍を

て手中に伝ひ来る民部卿入道女房の手次に
て此手の除に何伝さらまほしくこの事れかるに
して滝のひきに入る万きまを合て字分まさる
かとに此逆歌をまたそうに為教めれ
山より柴を折て滝の前にかくきて
伝うまを水の言を字えたるに入るとて
岩苔とりの　鶯はさけられ
弁地日近材集に加八十草として水の底に生
すと云せまを水を為にして竜を作る
その中に入て松柏の木をに為作るの縄を
結ひ作けて夫に竜にして数丈の谷に下る
山川の魚とりるに又しうのぬくするに
莚　二枚　廣　きりの唐
新古とのの高に加なまさに表作る

為雲居禅師喜撰法師為好歌なのそ
をまを二の伝にうくきに下りさるを略也
に宮をる為後の附塩梅を味をに一し第一を
雲居禅師の　堅立　横の五尺に入をる為学れ唐と
為にのまに入るまをし芭蕉やなるを心とをて法けて
為作うをめるりを一日にして生明の伝
北に地を為めなるの方丈の記に唐れ
ひて宮と手則りるしの菓子をうゆと云
きるに方丈の記を一丈四方なり莚二枚に廣
きとなるまに入に一丈四方を莚に法寺法に生明の
伝に必宮をり菓子をそろけて麦作ると
潮をるの伝潮の貴なりとる一
基　手を　たるきぬしの月

愚考此白郊外へ送りて帰るを惜むなりき
なりきなりしを意味深長なるの
義をさしてきぬしとなりを本朝の風俗と
なれば秋の日永く網入よ
雪舟の湊れをとり矣ひ水
愚考躍を江源武鑑に曰菱長の氏伊勢
まてたまとゆへに伊勢音頃といふ
伊勢の河法を白れうへに見えねとも丹波
のうて網に出て見るまくいやさのさるを
まて躍をすると字いやとのやう乳事を
をとりて見に行とといふるを笑ひ彩
むとりて取に伊勢に自然と白れうらふく
まてなるるを見則伊勢白れあつのひまて二白
の間に伊勢と字ゆるを上白の白隠なり

なるまりのさら孫旅ヶ見て五枚
一書に雑混孫と書るを八郎大東まて義分の
夜男女聚會席を同しうして雑り寝ると云く
旅ヶ原を四月一日江列坂田郡女子を男を招
まる数かと諸をはしりて云て白云ふをとねやを
まるいをとりを通ひのを毎りのるまてと
侍るるる
はしりし一郡聳れ
雪を曰一本に はしりと書て何るを非るり
さを信中観点の侍るり日本国中遊治の文
まてをの何を見たるて
るに廣ひまてるを刑刻染身てを
らをの家の岳るり聳と成て浦に聳と

[illegible]生涯をすごすおもむきそこの
しこなりてさうしのうしろにかくしかるべき人中の往幸を法とし
ゆゑ給の通情をうけ次に御の我妻に自まて安堵
の[illegible]

行幸のたぬ[illegible]　土器

愚考行幸を天子御幸を仙洞禁裏独断曰
天子之車駕所至臣民被其德澤以為僥倖
天子の行所幸者といふ義なり
[illegible]を[illegible]の[illegible]の[illegible]のいりめしく
一書に茶台行幸なきに[illegible]の[illegible]に交代
きしるす義[illegible]の[illegible]古刀[illegible]
仮令八[illegible]月佐渡を則[illegible]二月加賀大[illegible]三月
越前守国吉と義[illegible]の次第なり　一説に

往古を番[illegible]治国しより月し禁裏[illegible]為
石御釵を献[illegible]　常笠曰[illegible]
治常に[illegible]行幸の土器を法と
[illegible]の[illegible]一国一城の土京[illegible]
護の番[illegible]をきこゆる一し昔を
武士自[illegible]の刀釵をうち用ひ[illegible]
さきたその中に大名なりぬ一そまを行
幸なとあるて[illegible]乱世[illegible]
あり法一事[illegible]ぬと[illegible]
[illegible]書に[illegible]
家細川三[illegible]迎[illegible]伊達改
[illegible]軍家に[illegible]三[illegible]
[illegible]
[illegible]一[illegible]

して大名をこのゝしる此時代の時節の白拍子
次れ門ひらくといふてあるべし

昌陸の松とゝ号ぬ御代の表

一書に昌陸ゝ里村氏連歌の花れ十ゝて元和
中れ人ゝる一書に年し正月十日松の表白を
献ゝるゝ柳営の御連歌於連歌間御無形
有ゆへに代て法眼位に叙す

元日れ木間の競ゝる足ゆゝ

一書に年ゝ山ゝの袖に引く弱の絶せ
ぬゝの表ゝ古歌とゝるゝと云て
一書に木間ゝ門松の見ゝて傳ゝ弱の表
ゝるゝをゝく作ゝゝ門松
の木ゝゝる一年改式終て天子ゝを見ゝる

三代実録に見えたる傳ゝ弱ゝ
日のゝゝ形ゝしゝゝを見ゆゝを見ゝ
ゝる形を見ゝゝ
愚考元日の儀式ゝ神武天皇元年に始て行
ゝゝと舊事記に見ゆ木間ゝ門松ゝて
競ゝるゝ則日の脚のゆゝやの形ゝをいふゝ一
し魏豹傳曰人間一世如白駒過隙耳又索隱
曰白駒謂日影也と
ゝゝ一説に木間ゝ地名鞍ゝの林鹿ゝ
元日れ吉例競ゝる者とゝ
門ゝ松若菜園れ
一書に貞徳の別荘若菜園ゝて
鯉の音水ゝの
安味堂曰白氏文集に曰梅花欲開鯉魚入龍門

曙れ人気牡丹震ふひらきそう
愚考元朝の早天かのしとゆゆく人れ面冥
きそふ桑和ふして色とそて牡丹花のなる毒
ふひらきて絳馨なるこの如しとそう
腰てらす元日星れ眠わ この那
愚考予この信濃ふて書橋唄の唱弘ふうふふ
ゆくしはもきそ山れ腰を照らす紗綾や綸子
そ腰をてらすそうそ花花れ彩しきふ紗
綾綸子等れ等をそめてゆるやのふ手眠わ春う
称を腰てらすと絳きるうう一
星そうし震ふめ先の日方れ色
愚考太一金鏡経曰極人氏斗極を見て
曰方れ名を定む東西南北是ふう又内裏雛
ふ日凡天地の間東西を狭く南北をかく長し

ゆ一ふ南北を長とそいふう此句曰方弥の意
味を含めり為てりふ林禁中の沙法そそらめ
称ふ白仏ふの法ふうこのや脇白ふふふ
られ此心指ふて解さすむと虚実の遠ひの
らむう
そふとそ小松負らむ 牛れ ゆ免
一書ふきのふ子日そ一牛のそふとそ小松を負
ふの為やそうむとふきのふそ子日そふを丑
れ日とりふふ紙 白そ形そむ
芹 摘とそけて酒 ふきき 瓢ふ
愚考詩曰思樂泮水薄采其芹魯侯戾止中略
在泮飲酒
花ふ望きて為ふう亜ふ死むう孔
一書ふ為花埋残為對古人

古池や蛙飛こむ水の音

此句を真如實相の玄章なりとて尤大事の中に大変なり中し他なり評すべきなりなるなと何某くまうの注釈抜こと解なるなるかうなる也俗語なる故てていかんを知らざる也

俗なる一しいなる解くなる玄意を探る事なるなる音の一字をいなれなりしやらむ姿を解く為く脱を解く為くなるの玄音なり芭蕉注釈をくなるるめを玉なる法を蓄金なる留する也紙度をとらむ玄用の舌をうこをするるるまとして蕉風一流の肝要只此一事なる有れくはしくを古池集水鏡を見て玄中に玄を納得すべし

春野琴

玄法なるさくくを曲なる庵 二つ

玄味堂曰芭蕉の跡を役行去の芭蕉を右往
為る往庵なり様を芳野に来物なる曲をなる
なるなり　愚考吉野山なる玄美野琴とハ歌を
為なるなり雅なる様をまけるとして一緑なる見えなる
去の様をまけると伝なるなるなるなるなるなるなる目を
はけて解すべきなるなる又美野といなる端書な
吉野なるなるなるれ徒なるなるとなるなる撰集抄
なる信野国伝聖といなる西なる拙感しなるなる
なるの端の茅なるなるなる芭蕉人の通なるなる芭蕉の
見ゆるなる法をて分入見まハ形なるれ桔梗なる
なるや萩落なるむと形なるけなる庵なるなる内なる雅物
意なる形なるすなる傷物なるなるまなる西外同て云
ハ傷をいつなるなるれ入いひしそ傷なるなるて芭
一法又云ハ傷を物なるなるなるなる俗傷

永の初年形くて此美よりと計りて余を為し
西行又奥の方へ見送れば行る人はきて分入る人
は形ばかり形の唐ゆりさし抜きて見る人も又
ものゝうちなるその傍舎営して眠るかたく
往生しうるとの是よりかれ次第に装束の
附合はいとて注すべしまたこの歌を一首は
仮りそめの根本を此美よりとなのまそ美ぶ宮
て機を曲て唐としてれバしばらむものとと和
語の前を歌句は形して白仮をるれるる美
野吟仮世の説是記を足跡をる唐ゆ河
を白の仮すして峠さの名をるとなる美ハ
さらを形曲てとしてを和ゆ一首れ魂をる
麓寺うれぬるのを機うを
愚考禁ちを小倉山のとをる古歌は松の

みや双の景の禁ちる彩潤れ月は新りあをそ
枝をてさられ垂きるあぶ
一書は枝を余れ木よりは芽ををるを垂
を垂を垂機はけ冷をるのを
武蔵坊をとるの数
すのけやをるの空れ夜川
愚考詮繋を山伏の法具をるを垂は仮さ
ゆ枝の形ゆは名を大和本学は曰美ら
むとする附白花をを資を形を一名小
てをり鈴繋を資を付物記曰役小角が時
入箕面滝穴直奉値龍樹菩薩遺傳授之九以
墨色為本黒色者不移余色唯住自位而已是
則十界一念之義相也云〻
夕歌は雅炊景き蕨屋

敬秋云盧倫の詩の一句田夫就餉遅依草
雲出しし人をやすむる月見哉
一書に西上人ありしに雲れる歌古て月
をもてるすがさしるる遠の音なり
色うつる家も面白や秋九月
愚考色うつる家も寺の秋初なり祖師の名
を色うつるの先ちうる一二の羅王堂をしてこ
色うつる所珍曰反梁王始以泥坯焼仮ち
臭色芒て新のみ多し月見哉
愚考一本に臭色芒て新となるを非こ
すして群集の形を画くを新の外多く書
て此方より見渡すなり